

養育環境と養育者の意識が中学生の QOL に与える影響

— 家族ストレスモデルと家族投資モデルの結合による検討 —

○ 久留米大学 池田 博章 (会員番号 8802)

大西 良 (長崎国際大学・6793)

子どもの QOL、家族ストレスモデル、家族投資モデル

1. 研究目的

貧困問題は解決困難な社会問題として認識されている。厚生労働省の「平成 25 年 国民生活基礎調査」(平成 26 年 7 月公表)によると、生活が「苦しい」と答えた世帯の割合は、「児童のいる世帯」が 65.9%、「母子世帯」が 84.8%、また「子どもの貧困率」は 16.3% とある。これらのデータから子どもをもつ世帯の苦しい生活状況の一端がみえる。子ども期の貧困経験が、大人になってからの学力や生活水準などにマイナスの影響を及ぼすのであれば、今後さらに格差社会が進むことが予想される。本研究では、進学や就職などのその後の進路が多岐に分かれる義務教育の最終学年である中学 3 年生に注目し、子どもの Quality of Life (以下 QOL) という尺度を用いて、「貧困の連鎖」に代表されるように、子ども期の養育環境や養育者の意識などが、子どもにどのような影響を与えているのかを明らかにする。

2. 研究の視点および方法

1) 中学生版 QOL の構成

中学生版 QOL の尺度は、WHO の成人用 QOL 質問紙を開発したメンバーである Bullinger.M らがドイツで開発した Kiddo-KINDL^R (Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children, Revised Version for 13 to 16-year-olds) を、松寄ら (2007) が日本語訳したものである。子どもの QOL は 6 つの領域 (身体的健康、情緒的 Well-being、自尊感情、家族、友達、学校生活) に分かれており、その合計点を「QOL 総得点」とした。

2) 家族ストレスモデルと家族投資モデルの結合による検討

発達心理学の分野などにおいて、養育環境などが子どもに影響を及ぼす研究モデルがある。それが養育者のストレスを経由した家族ストレスモデル (Family stress model : Conger et al, 2000 など) と家庭の物的環境を経由した家族投資モデル (Family investment model : Becker et al, 1986 など) である。本研究ではこの 2 つの組み合わせたモデル (Martin et al, 2010 ; Schofield et al, 2011 など) を作成し、QOL 総得点を目的変数とした構造方式モデリングによるパス解析を行った。

3) 調査対象・調査時期・手続き・調査項目

A 県 B 市の公立 C 中学校に通う中学 3 年生 237 名とその保護者（養育者）を対象として、2015 年 2 月に自記式の調査用紙による調査を行った。調査用紙の配布および回収については、C 中学校の学級担任を通じて中学生と保護者（養育者）へ配布し、約 2 週間後に回収を行った。回収枚数は中学生 211 枚（回収率 89.3%）、保護者（養育者）119 枚（回収率 50.2%）であった。本研究の解析で使用了項目は以下のとおりである。保護者（養育者）への調査項目は、①保護者（養育者）の基本属性（子どもの人数、家族構成、父母就業状況、経済的困窮感）、②家族ストレスモデルに関する項目（子育てに対する肯定感・負担感・不安感、子どもとの交流機会の頻度、子育てに関する相談相手の有無など）、③家族投資モデルに関する物的投資の項目（自宅の書籍の数、習い事等の数など）である。また中学生への調査項目は、中学生版の QOL、学校の 5 教科（国語・数学・社会・理科・英語）の自己評価である。各項目の度合いや頻度によって点数化・標準化し、解析を行った。

3. 倫理的配慮

本調査は無記名とし、調査対象者への協力依頼文書の中で、本調査の趣旨と目的を伝えた。また調査への協力は任意であること、回答は統計的に処理されて個人の回答が特定されることはないこと、結果は学術的な目的以外には使用しないことなどを明記した上で、同意の得られた者から回答を得た。本調査の実施にあたっては、C 中学校の管理職（校長や教頭教諭など）と調査方法や質問内容等について何度も検討を行った。また日本社会福祉学会研究倫理指針に準じて個人のプライバシー保護には十分な配慮を行った。

4. 研究結果

モデルの適合について、 $\chi^2=48.326$ 、 $df=42$ 、 $P=.233(P>.05)$ 、 $CFI=.974$ 、 $RMSEA=.036$ と高い適合を示した。家族投資モデルの流れでは、養育者の経済的困窮感→物的投資（習い事等の数など）→5教科の自己評価→学校生活（下位尺度）→中学生の QOL（総得点）へのパスが確認された。また、家族ストレスモデルの流れでは、養育者の子育てに対する肯定感→情緒的 Well-being（下位尺度）を經由したパスと、養育者の子育てに対する負担感・不安感→家族（下位尺度）を經由したパス、それぞれから中学生の QOL（総得点）につながるパスが確認された。すべてのパス係数において有意がみられた($P<.05$)。

5. 考察

養育者の子育てに対する意識（肯定感や不安感など）は、中学生の情緒的側面や家族関係に作用し、また養育者の経済的困窮感は養育環境（習い事等の数など）を經由して中学生の知的側面や学校生活に作用していることが確認できた。教育的環境の格差や養育者の意識の差が、現代の格差問題を生む一つの要因になっていると示唆されよう。